

Title	話し手の意味は話し手の心理といかに関係しているのか？
Author(s)	三木, 那由他
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2018, 52, p. 19-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76061
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

話し手の意味は話し手の心理と いかに関係しているのか？

三木 那由他

キーワード：話し手の意味／意図基盤意味論／集合的信念／言語哲学／社会存在論

1. 序論

「何かをすることで何かを意味している」と特徴づけられる行為を「話し手の意味 (speaker meaning)」と呼び、その主体を「話し手 (speaker)」、意味するためになされる行為を「発話 (utterance)」、話し手の発話が向けられる相手を「聞き手 (audience, hearer)」と称する。話し手の意味の必要十分条件を与える試みはGrice (1957) に始まり、そこでは発話に伴う話し手の意図を特定することによってそれを目指すという、いわゆる「意図基盤意味論 (intention-based semantics)」の構想が提示されている。以後、意図基盤意味論はGrice (1969)、Schiffer (1972)、Bennett (1976/1990)、Neale (1992)、Davis (2003)、Green (2007) などによって発展させられてきた。

こうした一連の議論では取り上げられてこなかった問題として、話し手の意味と話し手の心理との関係がある。これから雨が降りそうだということのあるひとが何らかの発話によって意味したとすると、その発話を受け取った聞き手は特別な事情がない限りは、話し手に対して、話し手が意味した事柄に対応した信念、すなわちこれから雨が降りそうだという信念を帰属するように思える。そしてそうした信念を前提にして、聞き手は話し手のこれからの振る舞いの予測 (話し手もまた出かけるときには傘を持っていくはず) や話し手のすでになされた振る舞いの説明 (話し手が先ほど洗濯物を取り込んでいた理由がわかる) を得るように思える。この特徴を「話し手の意味の心

理性」と称するとすれば、話し手の意味の分析は話し手の意味の心理性を説明できるものでなければならない。

こうした現象に対し、意図基盤意味論はわかりやすい説明を与えることができるように思える。だが三木（2014）、三木（2015）で論じたように、意図基盤意味論には別の点で重大な問題がある。他方でTaylor（1980）の議論から示唆される代案として、集合的心理状態を利用して話し手の意味を分析するという道もある。こちらは意図基盤意味論に生じるそうした問題を避けられる見込みがある反面で、話し手の意味の心理性に対しては、意図基盤意味論のもとで想定されるような率直な説明を与えることができない。これに対し本稿では、この集合的心理説のもとでも規範的見地から話し手の意味の心理性に対する十分な説明が与えられることを論じる。

以下では、まず第2節で本稿の議論が話し手の意味の分析という営みにおいてどのような位置を持つのかを説明する。第3節では、意図基盤意味論と集合的心理説の概要を述べ、第4節において意図基盤意味論が話し手の意味の心理性に対して与えるであろう説明について論じる。第5節では話し手の意味の心理性という現象がより具体的にはどのようなものなのかを再考し、それをもとに第6節では集合的心理説の見地から話し手の意味の心理性に対するより良い説明が与えられることを示す。

2. 話し手の意味の分析における課題と本稿の位置づけ

話し手の意味の分析には大きく二つの課題がある。第一に、話し手が何かを意味し、聞き手がそれを理解したときに生じる帰結（「コミュニケーションの帰結」と呼ぼう）の特定が試みられる。そのうえで第二に、そうした帰結に言及しながらある種の目的論的な仕方において話し手の意味の必要十分条件が求められる。つまり、話し手の意味の分析は次の二つの課題を果たすことでなされる（いずれも私独自の用語である）。

A) 帰結問題：コミュニケーションの帰結を特定する。

B) 接続問題：Aで特定された帰結と話し手による発話という行為とを結びつけ、話し手の意味に対する目的論的説明を構築する。

例えば意図基盤意味論の古典的業績である Grice (1957) では、話し手が（具体的な内容を特定せず）何かを意味するということの必要十分条件は「まさにこの意図を認識させることで〔当該の〕発話が聞き手にある反応 r を引き起こすことを、〔話し手が〕意図」（Grice 1957, p.220）することとして与えられている。この分析では帰結問題に対して、「当該の帰結とは聞き手がある反応 r を示すことである」という答えを与えたいので、こうした帰結と話し手の発話とを話し手の意図という概念を介在させることによって接続し、それによって話し手の意味の分析を与えている。一般的に言って意図基盤意味論という営みの特徴づけるのは接続問題へのこの特有の答え方であり、意図基盤意味論とは接続問題に話し手の意図という概念を用いて答える立場であると言える。帰結問題への答え方については論者ごとに立場を異にしている。

本稿では話し手の意味が話し手の心理と密接に関係しているという現象を取り上げる。この現象を「話し手の意味の心理性」と呼ぶことにするが、これによって念頭に置かれているのは、一見する限り、話し手が p ということの意味したとき、それを理解した聞き手は話し手に p という対応する信念を帰属することができ、それによって話し手に対する行為予測や行為説明が得られるようになると思われるという現象である。これはコミュニケーションの帰結から生じる事柄であるため、帰結問題に関係している。帰結問題は話し手の意味の心理性を説明できる形で解答されなければならない、それゆえ話し手の意味の心理性は帰結問題への取り組みに対する制約を与えるのである。

以上より本稿の位置づけは、帰結問題と接続問題という話し手の意味に関する二大問題のうち前者に関わる現象として話し手の意味の心理性を取り上げ、その観点から意図基盤意味論とそれへの代案とのいずれが帰結問題に対するより有効なアプローチとなるかを検討するというものとなろう。

3. 意図基盤意味論と集合的心理説

これまで話し手の意味の分析は事実上ただ一つのパラダイムに支配されてきた。それが意図基盤意味論である。その基本的な発想は、「話し手Sがxを発話することでpということの意味する iff Sは……p……という意図、および関連するその他の意図を持ってxを発話する」という双条件文を満たす意図の存在を仮定したうえで、空隙部の埋め方を探ろうというものである。

この分析において話し手にはしばしば複数の意図が帰属されることになるが、そのうち少なくとも一つの内容によって話し手の意味する内容が決定されると想定される。話し手の意味する内容を決定するそうした意図（いわゆる「情報意図 (informative intention)」）と関連するその他の意図（「伝達意図 (communicative intention)」と呼称され、情報意図を認識させようということに関わる意図だとされる）の内容を、話し手の意味の必要十分条件を与える形で具体的に特定すること、それが意図基盤意味論の目標となる。¹⁾

情報意図が具体的にどのような意図であるかは、意図基盤意味論を採用する論者のあいだでも意見が分かれており、次のようなものがこれまでに提案されている（ここでは直説法的発話のみに考察を限定する）。

- 聞き手に話し手がpと信じていると（そして場合によっては聞き手自身にもまたpと）信じさせようという意図（Grice 1969; Neale 1992）²⁾
- 聞き手にpと信じさせようという意図（Bennett 1976/1990）
- 話し手が聞き手にpと信じさせようという意図しているということに対して事態Eの成立がその決定的な証拠となっているということが話し手と聞き手のあいだの相互知識になるのに十分となる、そうした事態Eを実現しようという意図（Schiffer 1972）
- 話し手の発話を話し手のpという信念への直接的かつ偽装のない指標（indication）としようという意図（Davis 2003）³⁾
- pということを顕在的（manifest）にしようという意図（Green 2007）

情報意図の内容は、意図基盤意味論の各立場からの帰結問題への解答でも

ある。実際、上記において特定されている意図の命題的内容、例えば一つ目の立場における話し手が p と信じているという聞き手の信念などは、コミュニケーションの帰結を特徴づけている。

上記の意図基盤意味論の各理論において、コミュニケーションの帰結は話し手や聞き手の個人的な心理状態に言及するか、もしくは非心理的な情報論的關係に言及するかという形で特定されている。話し手が p と信じているという聞き手の信念や p という聞き手の信念は、聞き手が持つ明らかに個人的な心理状態である。二人の人物AとBのあいだの相互知識も、シファアの定義に従うと結局のところ各人が持つ個別的な心理状態の記述を連言で結んだものに過ぎない。というのも、AとBに p という相互知識が成り立つということは、Aが p と知っており、かつBが p と知っており、かつAが p と知っているとBが知っており、かつBが p と知っているとAが知っており、かつAが p と知っているとBが知っているとAが知っており、……（以下、無限に続く）こととして定義されているのだ（Schiffer 1972, pp.30-31）。

これらの立場が話し手や聞き手の個人的な心理状態を持ち出す一方で、デイヴィスの用いる指標という概念は、「『AがBの指標となる』はおおよそ、AとBのあいだに因果的ないし統計的な関係があり、その関係ゆえにAは適当な位置にいる観察者にBと期待する理由を与えるということだ」（Davis 2003, p.69）と説明されている。グリーンの顕在性は「公的にアクセス可能」（Green 2007, p.65）であることとされ、いずれの立場も話し手や聞き手が持つ心理状態というものに言及することなく、コミュニケーションの帰結をより客観的な情報構造として特徴づけようとしている。

いずれの系列にも属さない第三の道は、集合的心理状態によってコミュニケーションの帰結を特徴づけるものである。こうした見解が取りうる一つの形は、話し手と聞き手の集合的信念という概念を用いることで得られる。そうした理論がこれまでに明示的に打ち出されたことはないが、私が採用したいのは次のように話し手の意味と聞き手の理解を分析するラインである。

(a) 話し手Sは x を発話することで p ということの意味する *iff* Sによる x

という発話は、Sがpと信じているという集合的信念をSと聞き手Aから成る集団が持つことへの、Sにおける用意の公然たる表明である

- (b) Sによるxの発話をAが理解する iff AはSがxを発話することでpということを意味していると認識し、かつこの認識が理由の一部となつて、Sがpと信じているという集合的信念をSと聞き手Aから成る集団が持つことへの、Aにおける用意の公然たる表明（頷く、目を合わせるなど）をする

この見解においては、コミュニケーションの帰結とは、話し手がpという個人的な信念を持っているということが話し手と聞き手のあいだの集合的信念になることとして特徴づけられることになる。

ここで前提とされているのはギルバートによる集合的信念の分析である。まずは集団に帰せられる集合的信念と個人に帰せられる個人的信念との違いを確認しておこう。ギルバートは詩歌鑑賞グループの例を挙げて、前者が後者（の連言）には還元できないことを指摘している（Gilbert 1987, pp.200-201）。そのグループでラーキンの詩「教会へ行く」の評価について議論した結果、その最終行が感動的だという結論に達したとする。このときこのグループには「教会へ行く」の最終行は感動的だという集合的な信念が帰せられるが、しかしそれによって個々のメンバーが（ほとんどのメンバーが、であってもよい）個人的にはそれに反する信念を持っていることは妨げられない。従って集合的信念の帰属は対応する内容を持つ個人的信念がメンバー（の多く）に帰属されることと同値ではない（それゆえ、対応する内容を備えた相互知識（信念）がメンバー間に成り立つこととも同値とはならない）。

さらにギルバートは集合的信念というものの内実を分析していく。その詳細には時期による相違があるが、近年だと「ある集団Pのメンバーたちがpということを集散的に信じるのは、一体となつて（as a body）pと信じることへそのひとたちが共同的にコミットしている（jointly committed）場合、その場合に限る」（Gilbert 2002, p.137）とされている。一体となつてpと信じることに共同的にコミットするとは、pと信じる単一の物体を可能な限り模

倣する (emulate) 責務をメンバーたちが負うことである (Gilbert 2002, p.138)。そしてこうした共同のコミットメントを形成する際には、集団のメンバーたちがそうした共同のコミットメントを形成することへの個人的な用意 (readiness) をそれぞれ表明することになる (Gilbert 2002, p.139)。

私の採用する分析は、話し手と聞き手が一個の集団を構成するものと見たうえで、話し手の意味と聞き手の理解を各々におけるこうした用意の表明という行為として捉えるものとなっている。このとき、話し手の意味に関する前述の捉え方のもとで、コミュニケーションの帰結とは話し手が *p* という信念を持っているという話し手と聞き手のあいだの集合的的信念が形成されることとなる。こうした立場を動機づけるのは、Taylor (1980)に見られる意図基盤意味論批判だ。テイラーはコミュニケーションの帰結を相互知識のような概念で捉えようとする見解を批判し、実際にコミュニケーションが成立した際には、相互知識には還元されないような仕方、話し手の意味したことは話し手と聞き手における「我らのあいだのもの (entre nous)」となると論じる (Taylor 1980, p.294)。テイラーの議論はそれほど明確ではないが、ギルバートによる個人的な心理状態への集合的な心理状態の還元不可能性の論証と軌を一にするものと解釈することができる。

厳密には、コミュニケーションの帰結が集合的な心理状態によって特徴づけられるという立場は、必ずしも意図基盤意味論と不整合なわけではない。というのも、意図基盤意味論の定義をなすのは接続問題に対してもっぱら話し手の意図という観点から解答を出すということであり、これは帰結問題にどのような答えを与えるかということとは原理的に独立であるためだ。とはいえ、あるひとが共同のコミットメント形成に向けた用意の表明をしているということ自体は、当人が単にそのように想定しているというだけでなく、当該の集団のメンバーたちのあいだで公然のものとなっていなければならないとされる (ギルバートはルイスの言う「共通知識 (common knowledge)」とならなければならないとしているが、ここではそうした特定のコミットメントを避けて単に「公然のもの」としておく) (Gilbert 2002, p.139)。そうし

た条件を満たしつつ、意図基盤意味論を維持した話し手の意味の分析を与えることができるのかは、少なくとも定かではない。

以上により、コミュニケーションの帰結に関する意図基盤意味論の各立場における捉え方と、そして私が採用したい集合的心理状態からの捉え方とを見てきた。本稿で取り上げる話し手の意味の心理性について、どちらがよりもっともらしい説明を与える見込みを持つだろうか？ 一見すると、集合的心理状態説には見込みが薄く思える。というのも、すでに見たように集合的心理状態と個人的心理状態は還元不可能な形で区別されるため、コミュニケーションの帰結をある集合的信念の成立として捉えたときに、そのことと話し手個人への信念帰属や話し手個人の行為の予測や説明との関係が不明確だからだ。だが本稿では、集合的心理状態説のもとでも話し手の意味の心理性に関して十分な、それどころかより良い説明が可能であることを論じていきたい。だがまずは直観的に理解する限りでの話し手の意味の心理性に対し、意図基盤意味論からどのような説明が与えられるのかを論じる。

4. 意図基盤意味論からの説明

直観的に理解する限りにおいて、話し手の意味の心理性とは、話し手がpということの意味し、聞き手がそれを理解したなら、標準的に聞き手は話し手にpという信念を帰属できるように思えるということであった。意図基盤意味論の論者たちはこうした問題を見落としており、自らそれを説明しようとはしていない。だがもしも意図基盤意味論の諸立場から話し手の意味の心理性を説明するとしたら、どのような道筋が与えられるだろうか。

Grice (1969)やNeale (1992)のように話し手がpということの意味する際の情報意図を「聞き手に話し手がpと信じていると信じさせようという意図」として特定する場合には、話し手の情報意図の実現がすなわち聞き手による話し手へのpという信念の帰属をもたらすということになる。この場合には話し手の意味の心理性についてこれ以上の説明は必要とさえならない。

それ以外の立場においては、話し手の情報意図の実現は直ちに聞き手による話し手への対応する信念の帰属をもたらすわけではない。こうした場合にはいくつかの補助的な想定が必要となるが、そのうちの一つはシファアの述べる次のようなものである。

Sがxを発話することで何かを意味しようというのならば、彼が何かを意味するために必要となる意図のすべてが公然のものに（out in the open）なっていないなければならない。何かを意味するという行為を構成しながらも「隠されている」意図などという可能性はあってはならない。（Schiffer 1972, p.39）

シファアの論じ方は、話し手の意味という行為は話し手の意図によって分析されるという意図基盤意味論特有の前提を組み込んだものとなっているが、ここで提示されている想定は実際にはもっと一般的な直観からの帰結として考えることができる。話し手が何かを意味し、聞き手が話し手の意味していることを理解するとき、話し手が何かを意味するという行為をまさに行っているということは、話し手と聞き手のあいだで公然のこととなる（「話し手の意味の透明性」の原則とでも呼ぶことができよう）。伝達しようとしている内容だけを聞き手に認識させ、自身が何かを意味するという行為をしているということは隠しているような話し手は、そもそも意味するという行為をしているとは認められないのである。この話し手の意味の透明性に、話し手の意味は話し手の意図によって分析されるという意図基盤意味論の前提を結びつけたならば、上述のシファアの主張が導き出されることとなる。

もう一つの補助的な想定は「話し手の誠実性」の原則とでも呼べよう。話し手が聞き手に信じさせようと意図している（あるいはそのような意図があるということを相互知識にしようと意図している）命題や、自分がそれを信じているという指標を与えようと意図している命題、顕在的にしようと意図している命題については、そうでないと考える理由がない限りは話し手自身

もまたそれを信じていると推定することができるという原則である。

話し手の意味の透明性と話し手の誠実性という二つの想定を置いたならば、話し手が対応する信念を抱いているということを聞き手に信じさせるということそのものが話し手の情報意図の内容となっているわけではない立場においても、コミュニケーションの帰結から話し手の意味の心理性が（話し手の誠実性が疑われていないという条件の下で）帰結することとなる。

意図基盤意味論に基づく話し手の意味の心理性に対する説明は、見たところもっともらしいものに思える。補助的な二つの想定についても、それらは意図基盤意味論の是非とは独立にそれ自体が直観に支えられている。こうして、話し手の意味の心理性は意図基盤意味論を集合的心理状態説よりも有利なものにするように思える。だが本当にそうだろうか。改めて話し手の意味の心理性という現象を再考したうえで、集合的心理状態説を擁護しよう。

5. 話し手の意味の心理性を再考する

これまでのところ、話し手の意味の心理性については単に直観的に理解し、話し手が p ということの意味し、聞き手がそれを理解したならば、聞き手は話し手に p という信念を標準的に帰属することができるという形で捉えていた。具体例を検討することで話し手の意味の心理性という現象を再考し、もっと明確な理解を得ることにしよう。

典型的な事例は次のようなものであった。恋人が「傘を持って行ったほうがいいよ」と言うことで雨が降るであろうということの意味し、私がそれを理解したとする。これまでに考えてきたように、このとき私は雨が降るであろうという信念を恋人に帰属し、そして恋人のこれからの振る舞い（出かけるときには自分も傘を持って出るだろう）を予測し、恋人のそれ以前の振る舞い（洗濯物を慌てて取り込んでいた）への説明を得る。この信念帰属、行為予測、行為説明という三つの事柄について、信念帰属がなされるがゆえに予測と説明が可能になるという説明上の先後関係があるように直観的には思

える。前節での意図基盤意味論からの話し手の意味の心理性に対する説明は、そうした先後関係を前提として、直接的には信念帰属だけに向けられていた。

だがこの前提は妥当なのだろうか？ Lackey (2008)の提示する例は、もともとは証言の認識論の文脈で持ち出されたものであるが、話し手の意味に関わるものとして作り替えることで、この前提を疑う根拠を与える。ラッキーの例に登場する信心深いクリスチャンの教師ステラは、自身の信仰としては進化論が誤っているという信念を抱きながらも、科学的証拠が進化論をサポートしていることは理解し、しかも生徒たちには科学に支持される事柄を教える責務が教師たる自分にはあると考えている (Lackey 2008, p.48)。この状況において、ステラの信仰については公然のこととなっているとしたうえで、ステラが授業中に「現代のホモ・サピエンスはホモ・エレクトスから進化した」と言い、それによって言った通りのことを意味したとしてみよう。

この場合に、生徒たちはステラに対して現代のホモ・サピエンスはホモ・エレクトスから進化したという、進化論が正しいことを前提とした信念を帰属しはしないだろう。ステラが進化論を偽だと信じていることは生徒たちにもわかっているからだ。それゆえここでは話し手の意味と話し手に対する信念帰属との先の例で見たような繋がりとは途絶えている。にもかかわらず、生徒たちはステラの行為に対する予測と説明を得ることができる。ステラは今後も授業内ではホモ・サピエンスがホモ・エレクトスから進化したということや、進化論が正しいということと整合的な発言をし続けるだろうし、また以前にホモ・エレクトスに関する資料を重要なものとして配布していたことなどを、ステラが自身の発話によって意味した事柄は説明するように思える(それが具体的にどのような説明なのかというのは、次節の問題となる)。この例からわかるのは、直観的な理解に反して、話し手の意味によってもたらされる行為予測と行為説明の可能性は話し手への信念帰属とは独立であり、しかも信念帰属はコミュニケーションの帰結として必ず可能になるわけではないということである。だとすれば、信念帰属をまず説明するという形での話し手の意味の心理性の説明は的を外していることになる。

そうした現象は、実のところ日常においてよく見られる。私たちは教師として、誰かの友人として、親として、必ずしも自分自身が持っている信念と整合しないようなことを発話によって意味し、コミュニケーションをおこなっている。このようなコミュニケーションの当たり前さは、こうした現象を例外とするのではなく、むしろ標準と見なす説明を動機づける。意図基盤意味論による話し手の意味の心理性が前節で見たようなものとなるならば、そのような説明を意図基盤意味論に期待することはできない。だが集合的心理状態説にはそうした説明が期待できるのである。

6. 集合的心理状態説からの説明

本稿で支持している集合的心理状態説では、話し手がpと意味し、聞き手がそれを理解したなら、話し手がpと信じているということが話し手と聞き手のあいだの集合的信念となる。このことが話し手の意味の心理性をいかに説明するのだろうか。鍵となるのは集合的信念の規範的側面である。

ギルバートによれば、「集団の信念がひとたび確立されると、それに対立する信念をあからさまに表明するような成員は他の成員からの非難にさらされるものと、参加者たちは理解することになる」(Gilbert 2004, p.171)。それゆえ話し手がpと信じているということが話し手と聞き手のあいだの集合的信念になったならば、話し手がpと信じているということとあからさまに矛盾するような振る舞いをすべきではないという義務が話し手と聞き手に課せられることとなる。

ただしこうした義務に対してギルバートは一つの留保を与えている。成員が「個人的に話す」限りでは、当該の集合的信念と相反するような信念を表明することに問題はないのである (ibid.)。これはすなわち、ラーキンの「教会へ行く」の最終行は素晴らしいという集合的信念が形成されたあとでも、あるメンバーが「個人的な見解としては、この最終行は平凡だと思う」などと言ったり、あるいは個人レベルで問題の最終行を平凡なものに見なしてい

のような振る舞いをしたりすることは非難に当たらないということだ。だとすると、集合的信念は個々のメンバーの行為の予測や説明とは必ずしも結び付かないことになり、集合的心理状態説からいかにして話し手の意味の心理性が説明されるかは定かでないかのように見える。

ポイントとなるのは、集合的心理状態説でコミュニケーションの帰結が、 p という集合的信念ではなく話し手が p と信じているという集合的信念であるということだ。前者であれば p という集合的信念が形成された集団内であっても、話し手は個人レベルでは p ではないという信念を表明するような振る舞いをすることが許される。しかし話し手が p と信じているという集合的信念が形成された集団においては、 p ではないという信念を話し手が個人レベルで表明したなら、それはすなわち話し手が p と信じているという内容を持つ二階の集合的信念に相反するような信念をあからさまに表明するということであり、非難に当たることとなる。こうして話し手には、 p であるということと整合的な振る舞いをするという義務が課せられることとなる。聞き手はそうした義務が今後の話し手の行為を動機づけるものとすることで、話し手に対する行為予測を形成する。

行為の説明に関しても、同様に規範的な観点から説明することができる。地蔵の前を通るたびにお辞儀をしていたひとが、あるとき「地蔵には敬意を払わないといけない」と言ったなら、そのひとの以前の行為は、地蔵には敬意を払うべきだという規範に（これまではそうした規範を明示化していなかったにせよ）従ったものだったのだと説明できることになるだろう。規範はこれからの行為を予測させるだけでなく、これまでの行為に対してもそれを暗黙の裡にせよ当該の規範に従っていたがゆえのものだったのだと説明できるようにするのである。同様のことがコミュニケーションの帰結においても生じていると考えることができる。

重要なのは、話し手は p と信じているという集合的信念が効力を持つ文脈では話し手は自らが p と信じているということと相反する振る舞いをするのができず、ゆえに p であることと整合的な振る舞いをするよう動機づけら

れるが、これが直ちに実際に話し手がpと信じていることを含意はしないということである。関連する集団を背景とした場合にはpであることと整合的な振る舞いをしながらも、そうした文脈を離れたときにはpでないという個人的信念を表明し、その信念に従って振る舞うということも可能である。ステラの例はそのようなものとして捉えることができる。

だがそうになると、話し手への**個人的な**信念の帰属は、話し手の意味によっては可能とならないのだろうか？ そうではない。ステラの例のように、話し手と聞き手が形成する教室コミュニティといった形で関連する集団が限定されている場合には上述のことが成り立ち、話し手への個人的な信念の帰属は避けられながらも、規範的観点から行為の予測と説明が与えられることとなる。しかし私たちの発話はしばしばそうした限定なしになされる。そうした場合には、対応する集合的信念によって与えられる規範に、話し手は文脈を限定せず全般的に従うべく動機づけられる。そして話し手の誠実性の集合的心理状態説版として、そのような規範をもたらしうような行為を自らする話し手には、その誠実性が疑われない限りは、対応する個人的信念が推定されることができると考えることができる。

重要なのは、そうした個人的信念の帰属は条件付きであるということだ。話し手がpと意味し、聞き手がそれを理解するとき、話し手がpと信じているということが話し手と聞き手のあいだの集合的信念となる。するとこれは話し手がpと信じているということにあからさまに反するような振る舞いをすべきではないという義務を、話し手と聞き手の双方に課すこととなる。すると結果的に話し手に対しては、こうした集合的信念が帰属される集団を背景とする限りで、pということと整合的な振る舞いをする動機付けを与えることとなり、また過去の振る舞いについてもそうした義務に基づく説明が得られることとなる。個人的信念の帰属は、そうした背景集団が限定されていないときに限り可能となるような、オプションな事柄なのである。こうした説明においては、ステラの例のような現象も射程に収めながらも、意図基盤意味論のもとで容易に説明されるところと思われた現象についても、難なく説明

することができる。話し手の意味の心理性は一見したところでの印象に反し、意図基盤意味論よりも集合的心理状態説こそを支持する根拠となる。

7. 結論

本稿では話し手の意味の心理性という現象をもとに、話し手の意味、とりわけ話し手の意味と聞き手の理解から生じるコミュニケーションの帰結に関して、意図基盤意味論と集合的心理状態説という二つの立場を比較した。話し手の意味の心理性は一見すると前者に有利に働くと思われるが、それが具体的にどのような現象であるのかを例をもとに再考したならば、必ずしもそうではないということがわかる。さらに集合的心理状態説からは規範的見地から話し手の意味の心理性に対してより良い説明が可能となる。こうした点から、本稿では集合的心理状態説が意図基盤意味論に対して、この点におけるアドバンテージを持つものと結論する。

注

- 1) 「情報意図」、「伝達意図」という用語は Sperber & Wilson (1986/1995) による。
- 2) ニールは信念に代えて思考 (thought) を用いるが、この違いは本稿の論点に関わらない。
- 3) この通りの分析が Davis 2003 に見られるわけではないが、p.57 における話し手の意味の分析と p.49 における「AとしてBする」の定義から帰結する。

文献

- Bennett, J. (1976/1990). *Linguistic Behaviour (Paperback Ed.)*. Hackett.
- Davis, W. A. (2003). *Meaning, Expression, and Thought*. Cambridge University Press.
- Gilbert, M. (1987). "Modeling Collective Belief". *Synthese*, 73: 185-204. Reprinted in M. Gilbert (1996), *Living Together*, Rowman & Littlefield: 195-214. Citations refer to the reprinted edition.

- Gilbert, M. (2002). "Belief and Acceptance as Features of Groups". *Protosociology*, 16: 35-69. Reprinted in Gilbert (2014): 131-162. Citations refer to the reprinted edition.
- Gilbert, M. (2004). "Collective Epistemology". *Episteme*, 1: 95-107. Reprinted in Gilbert (2014): 163-180. Citations refer to the reprinted edition.
- Gilbert, M. (2014). *Joint Commitment*. Oxford University Press.
- Green, M. S. (2007). *Self-Expression*. Oxford University Press.
- Grice, H. P. (1957). "Meaning". *The Philosophical Review*, 66: 377-388. Reprinted in Grice (1989): 213-223. Citations refer to the reprinted edition.
- Grice, H. P. (1969). "Utterer's Meaning and Intentions". *The Philosophical Review*, 78: 147-177. Reprinted in Grice (1989): 86-116. Citations refer to the reprinted edition.
- Grice, H. P. (1989). *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press.
- Lackey, J. (2008). *Learning from Words*. Oxford University Press.
- Neale, S. (1992). "Paul Grice and the Philosophy of Language". *Linguistics and Philosophy*, 15: 509-559.
- Schiffer, S. R. (1972). *Meaning*, Oxford University Press.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1986/1995). *Relevance (2nd Ed.)*. Blackwell.
- Taylor, C. (1980). "Review of *Linguistic Behaviour* by Jonathan Bennett". *Dialogue*, 19: 290-301.
- 三木 那由他 (2014) .「意図基盤意味論に基づく話者意味の分析はなぜ誤っているのか」. *Contemporary and Applied Philosophy*, 5: 1033-1051.
- 三木 那由他 (2015) .「心理的であり公共的である意味について」(博士論文) . 京都大学提出 .

(文学研究科助教)

SUMMARY

Speaker Meaning and Speaker's Mind

Nayuta MIKI

When a speaker means something by an utterance and the hearer understands it, it generally follows that the latter can iterate an opinion about the former's mind. Suppose the speaker means that it will rain; the hearer can then seemingly attribute to the speaker the belief that it will rain. Based on this perception, the hearer can predict the speaker's future acts and can explain steps taken previously. I call this phenomenon "the psychological aspect of speaker meaning." In attempting to analyze the notion of "speaker meaning," one must account for this occurrence.

The paradigm of speaker meaning is intention-based semantics, according to which, the words "speaker meaning" should be analyzed in terms of speaker's intention behind the utterance. This view draws on the notion of intention and thus, ultimately, seems to yield an account of the psychological aspect of speaker meaning without much difficulty, appealing to some assumptions that connect intention and belief. Intention-based semantics, however, is problematic in other respects, and because of these difficulties, we have a good reason to advocate an approach that appeals to the notion of collective mental states. However, the latter methodology finds it difficult to explain the psychological aspect of speaker meaning because, according to Gilbert (1987), collective mental states and corresponding personal psychological states are not necessarily associated.

This paper attempts to defend the collective mental states approach. First, belief attribution does not necessarily happen in all incidences of the psychological aspect of speaker meaning. The phenomenon may be derived from an antecedent action prediction/explanation, and not vice versa. It also demonstrates that the action prediction/explanation, effected by the hearer after understanding what the speaker means, can be explained in normative terms. Forming a collective mental state implies a certain normative consequence for relevant parties. Such normativity provides a sufficient account of action prediction/explanation without appealing to a speaker's personal belief.